

## 〔三〕 学校行事における修学旅行の在り方

—実施計画と問題点の検討—

鈴木 洋 一 郎

(要 旨) この数年来実施し来った本校の修学旅行の実態を展望しながら、急速にレジャー化しつつある現下の旅行を反省しその問題点を検討し、高校修学旅行—研究旅行—の正しい在り方を追求したい。

### まえがき

「修学旅行」が学校生活の中で楽しい思い出の一つを占めており、この楽しみを学校行事の中に位置づけて指導するならば確かにその教育的効果は大きい。しかしこれら生徒の関心・興味とは別に、各学校においては、「旅行」の廃止・改善論が活発になされていることも事実である。実際、今日の社会情勢の推移、特に事故の頻発する交通事情の複雑さ、観光地・見学地の俗化—レジャー化—などから「修学」と「旅行」との間に大きな矛盾を生じ、得るものより失なうものが多いとも思われるのである。

例えば宿泊地が観光地のような場合には、教師の精神的負担や、夜間、生徒の睡眠不足からの疲労度のために、日中の見学に身がはいらず、たとい社会的見聞を僅かばかり広めたとしても、学校生活で育てられた規律性がむざんに踏みにじられてしまう例が多いのである。このような事情や理由から小学校の場合は宿泊なしの近距離の日帰り旅行を考えるのが多くなり、高校の場合も、廃止したり、またクラス毎や小グループで実施させ、またクラブ中心の他校との交換旅行なども併用して企画するものもある。

本レポートはこのような現状にあって本校の旅行の指導経過を反省しながら、その「在り方」について検討して来たものをまとめようとするのである。

### 本 論

#### 一、本校の修学旅行はどのように行なわれて来たか

修学旅行は学校行事に示された旅行的行事にあたる内容で、その取扱いについては「平素と異なる生活環境のなかあって見聞を広めるとともに楽しく豊かな集団行動を行なうことにより、集団生活のきまり公衆道徳などについて望ましい体験をつむように活動すること」とされており、この線に従って企画されるのは当然である。本校においては、この旅行的行事の意義を重視し、中学1年より高校3年まで各学年に旅行を計画し、実施しているのがである。表にすれば

学年	旅 行	場 所	内 容	現在
中1	臨海学校	浜 名 湖	体育科必須	×
		知 多 半 島	〃	実施
中2	林間学校	県内北設楽郡	H R 中心	×
		岐 阜 県	〃(希望者)	実施
中3	修学旅行	関 東 方 面		実施
高1	京都旅行	比叡山奥嵯峨	教科(社・国)	×
	林間学校	岐 阜 県	H R 中心	実施
高2	大和旅行	大和地方中心	教科(社・国・美)	×
	修学旅行	畿 内 一 帯	H R と 教 科	実施
高3	修学旅行	北九州方面	〃	×
	〃	中 国 地 方	〃	×

ここでは、高校の行事で、林間学校を除いた修学旅行について展望することにする。

高1の京都旅行は、これより先2年前から実施した高2の大和地方の研究旅行の成果から、高1を対象として、比叡山、竜安寺、奥嵯峨一帯の清遊コースを考えたのであるが、初めての試みでもあるし、また古典・芸術などへの理解、知識の不十分のため、現地における指導が予期した通りは運ばなかった。このために1回限りでこの旅行は中止された。なおこの結果については、国語科から本校の紀要第7集において報告された。

高2の大和地方の研究旅行はその回数は既に10を越えている。飛鳥地方だけの日帰り旅行から始めて次に斑鳩(いかるが)西の京に及ぶ一泊、更に吉野方面を加えた2泊、高3の修学旅行廃止に伴ない更に一泊加えられ、京都、奈良また高野山などと3泊4日へと発展して来ている。最初は万葉の自然、古美術の探訪など所謂古寺巡礼的な発想から行なわれたこの研究旅行も、次第に研究範囲とその対象を拡大してゆくうちにレジャー的要素も加えられると、いろいろな問題がお

こるようになった。なお、この点については後述する  
**高3の修学旅行**は北九州の4泊5日(車中泊1回)や夜行なしの中国地方1周などがあって見学地も多く卒業学年の楽しい思い出の一つでもあったが、旅行行事の検討の際、教師の負担度などや大和旅行の成果などから鑑みて、これを廃止して大和旅行を十分に活用することにした。

## 二、本校の修学旅行はどのように計画し指導したか ——特に大和旅行を中心として——

高2の旅行は土地柄多い「お寺めぐり」に終始しないように、次のような配慮が払われ、また全員に共通テーマと希望テーマを与えて研究的旅行を指導しようとしたのである。その配慮は次の通り。

### 1. 自然に親しむ時間を多くとろう

大和時代の自然は文化に対するそれではなく古文化を埋没し、それと調和し一体となっている自然であると言っていい。脱都会から自然へ、豊かな文化を埋蔵する大和地方の自然に親しむことは意義があり、今まで次のようなコースを考えた。

- イ 甘樫丘から展望とスケッチ
- ロ 飛鳥路を歩く
  - 飛鳥川沿い、酒船石から岡寺への山道
  - 鬼の厠から菖蒲池古墳まで
- ハ 山の辺の道を歩く
- ニ 古蹟、古墳
  - 藤原宮跡から三輪山、二上山(人麿の歌)
  - 古墳探訪、西の京辺を歩く、旧吉野宮(宮滝)
- ホ 早朝の散策
  - 橿原神域、山林美—吉野杉や高野杉
  - 吉野の旅館から如意輪堂までの山道往復

### 2. 古代美術を鑑賞する眼を開こう

飛鳥・白鳳仏・天平芸術の特徴  
 藤原仏と浄土教(信仰)

これらは主として古寺巡礼となりがちなコースであるが、十分の事前研究(古寺ブームで参考書多い)が行なわれれば、極めて効果の多いものであり、この古美術の鑑賞眼はひらけ、その印象は長く残るものである。

### 3. 現代文化との比較において考えよう

これには人文地理的なテーマや現代文学の素材としての大和地方があげられる。

以上のような配慮から考えられたテーマは次のようなものがあった。

#### 1. 共通テーマ

国語科……詩または歌を作ろう。旅行記を書く。

社会科……関係時代(大和時代)の年表作成

美術科……甘樫丘からのスケッチ(1時間)

#### 2. 班別テーマ(希望により一つを選択)

A 古典文学 万葉集研究

大和地方の自然や吉野川は万葉集にどう表わされているか。

B 古典文学 古事記・風土記・吉野関係作品  
 記紀歌謡・伝説からみた上代人の生活と吉野地方と古典文学

C 現代文学 小説・詩句

現代作家は大和地方をどう描いているか。

D 現代文学

現代の紀行・随筆文などを通して古美術鑑賞の眼を養おう。

E 古代文化

古代の墳墓群、型及び特色、巨石文化や古代人の生死観を調べよう。

F 古代文化

飛鳥文化を中心として飛鳥京、宮の所在、模様、法隆寺を研究しよう。

G 古代文化

白鳳・天平文化や奈良時代と平城京跡

H 人文地理

奈良盆地の地形、飛鳥地方の水系・溜池分布、条理制、環濠聚落の変遷、大和民家の構造

I 吉野地方

南北朝の吉野山を中心とした歴史と自然

これらのテーマは、その年度の指導教官や生徒の希望などにより、若干変更のあるのは勿論であるが、出発前の校内での事前発表、現地(宿泊地)でのミーティングでのグループ別発表や教官の指導などで十分その成果を深めることができた。その結果については、本校紀要第8集において詳細に報告したところである。

## 三、修学旅行の反省と問題点の検討はどのようにして行なわれたか

大和旅行が年を追って泊数がふえ、見学地が多くなっていった。また高3の修学旅行が廃止され、高2の大和旅行に統合されたことは前述の通りであるが、このように旅行が反省され、その泊数やコースに検討が加えられたときは、それぞれ委員の事前調査により、研究テーマが変更された。

#### イ 2泊3日と泊数が多くなったとき

一泊旅行のときは、万葉紀行、古美術鑑賞のように国語科の研究旅行の傾向が強かったので、従来の研究成果を更に発展させるために、社会科の参加を求め、古墳群・藤原宮跡や平城京跡や吉野離宮(宮滝)更に吉野山(中世文化)を加え甘樫丘からの展望もコースの中に入れた。(当時は甘樫丘への山路

も十分に出来ていなかった)このために、社会 国語科教官が夏休みに現地へ出張してその新コース発見に時間を費やした。この時のコースが大和旅行としては最上であるし、この方面への研究旅行は2泊3日でも十分に成果があがると思っている。

#### □ 高3の「旅行」が大和旅行へ統合されたとき

大和旅行に統合されて既に3回の旅行を実施しているが、この旅行のコース発見の事前調査も国語・社会、当該学年の担任と3教官により、前回同様丹念に行なわれた。その結果、従来のコースに高野山を加え、更に一日は自由選択観光コース3班を編成した。A班は山の辺道から室生寺方面へ、B班は奈良市内から生駒山ドライブコースへ、C班は和歌山海岸から紀三井寺方面へと旅行し、帰路は琵琶湖大橋から名神ハイウエーを利用した。

しかし4泊5日の旅行のため、奈良県下の同じコースを数回通るような時間のロスのあったことは反省させられたし、また従来の研究的色彩の旅行が次回から、やや薄れて観光・遊山的なものが生じる契機となったことも否定できない。

#### 四、本年度の修学旅行計画にあたり、考慮されたこと ——高校修学旅行委員会の報告を中心として—— 委員会設定までの経過

この2、3年来高校生の政治的活動をめぐる諸問題一所謂高校紛争一をきっかけとして生徒の学校教育学校生活に対する考え方(価値観)が急速に変動し、生徒の意識と教師の指導との間に相当の断層が生じていることは見のがせない事実である。生徒会のような活動よりも小グループ活動へ、生徒心得を始め制服制帽のような既成体制に対する否定と学校生活における自由性獲得のための諸活動などによって表わされている。修学旅行に対する考え方の変化もその一つである。

生徒が「修学」と「旅行」との間に大きな矛盾をもっていることは前に述べた通りであって、「旅行」に冠せられた「修学」は単なる修飾であって、生徒の希望を述べさせると「研究旅行」はさておいて「遠くへ行きたい…東北・北海道・九州」「自由にプランを作りたい」そして「小グループの旅行を」となるのが一般である。旅行に盛り込まれる内容やコースよりも、そのムードを楽しみながら旅をしようという感が強い

既成プランの研究コースをもって臨んでも与えられるものは拒むという心情から一旦はそれを保留させ、独自のものをつくりあげようとする。この生徒の実情を理解しながら、いかに指導し実現するかが問題として残るのであるが、旅行委員会ではこれを十分には把握しないままにその仕事を進めて行った。ここではその進行の経過と生徒指導の一部を報告する。

#### 1. 教官に旅行アンケートを求める……第1次調査

〈内容〉過去2年間の実績に鑑み、旅行の存続、改善、廃止の意見を聞き、またその実施時期や方向についても調査することにした。

その結果は次の通りである。

##### 修学旅行アンケートより

提出者 22名

① 修学旅行は存続していきたい 4名

A 縮小存続 1  
本年通り 3  
B 時期 従来通り 2 春休 1 高3 1  
C 方向 南紀方面、京都 奈良 各1

(意見)

1 余り行先を変えない  
2 観光旅行は不要、研究旅行でよい、宿舎内服装トレパン

② 修学旅行は存続を前提に検討 11名

A 縮小存続 3  
廃止 2  
新構想で検討したい 6  
B 時期 高2 1 学期 2 従来通り 6  
" 年度末 1  
" 2学期以外ならよい 1

C 方向 東北 1 北アルプス(黒部など) 1  
京都 奈良 2 四国 5 山陽 2  
北九州 3 山荘での合宿 1

〔意見〕

1. 修学旅行の性格を明確にせよ、現在のは中途半端  
2. 従来の高1林間学校を高2にうつし、内容充実して合宿

③ 修学旅行は廃止 5 および批判的 2 7名

1. 条件付……教科中心の研究旅行としての性格を出すのならよいが  
2. 交通混雑の中、団体割引をしてまで旅行せねばならぬ家庭経済でもないし、教師の指導負担大、生徒にも得るところ小  
3. 学校側で旅行まで骨折る必要なし、また功德もない生徒指導面でも問題を生むばかりである。  
4. 行事多い 教師の負担大、理想的な旅行ができれば。

資料アンケートからまとめると

(1) 修学旅行の在り方について十分に検討すべき時期に来ている。

イ 廃止の意見に十分耳を傾ける必要あり、  
時期指導上、教師負担大 学校行事多い

ロ 新しい旅行の在り方を  
本校の山荘を利用しての合宿

学校行事における修学旅行の在り方

ハ 研究的性格をつよく打ち出せ……新構想検討  
多い

性格が不明 中途半端 社会科、国語科として  
の狙いは何か今までの反省をききたい

観光的なものを払拭せよ

(2) 時期 高2 1学期3 2学期8 学年末3  
高3 学年末1

(3) 方向 東北1 北陸1 京・奈3 四国5  
山陽2 北九州3 山荘合宿1

以上の結果に基づき次のような問題点を会議の協議  
事項として提示し、諸意見を求めた。

問題点

1 研究的性格を出すには

イ 従来の旅行をどう活かすべきか……  
臨時的委員会の設置は？

ロ 新構想ならどこがよいか……

ハ 教科の参加はどうすべきか。

2 学校の年間行事においてどの時期に位置づける  
べきか。

3 旅行廃止の意見をどのように活かすべきか。

○ 廃止に踏みきるか

○ 段階的に廃止か

○ 廃止の際の処置

○ 廃止の意見を検討存続にどう活かすべき  
か。

しかしまだ資料として不十分な点もあるので、臨時  
に高校修学旅行委員会を設けて、そこで資料の整備と  
原案の提示を委任し、その委員構成を次のように定め  
た。

2. 高校修学旅行委員会

構成……7人

運営委員 学事部長（学校行事担当）

高1担任 2人 国語・社会・理科各1人

旅行諸案の提示と中間報告 (A～F)

11月上旬、委員は各自の自由な案を提示説明し  
て修学旅行の問題点を再検討し、その結果を中  
間報告の形で会議に提示した。

◎各委員の諸案 (A～F) は次の表の通り

	時期	コース	方法	特徴
A	高2 11月	飛鳥地方 法隆寺 京都方面	テーマ別 研究旅行 地理 歴史 美術 9月位から計画	従来の大和旅行をより一そう 調査研究主体に 2泊程度でよい 1泊にして2年の秋と3年の 春に分けるのもよい。
B	高2 5月下旬～6月上旬	大和地区 大阪	大阪湾臨海工業地帯の見学 (バス) ー1日目 グループ別に大和地方の歴史 的、文化的調査 研究ー2日目	従来のものに一部地理的要素 を加えたもの 2泊3日 グループ行動の行動範囲が広 範囲に広がらないよう奈良市 内とか、飛鳥地方とか、京都 市内というように、Fieldを 限定、制限する。
C	高2 終了時の春休み	① ② 名古屋——岡山——高松 ③④ ——坂出、新居浜——松山 ⑤ ——広島——名古屋	3泊4日～4泊5日 全員団体行動による見学旅行 主な見学地 ①水島工業地帯 ②屋島の熔岩台地の地形 ③塩田の壊廃とその後の利用 ④讃岐平野のため池灌漑 ⑤広島市内（三角州上の市街 地）	普通一般に行なわれている型 であるが、出来るだけ研究的 要素をもたせて地理の授業の 総まとめにする。 最近の変ぼう著るしい瀬戸内 海沿岸の地理的見学。

D	真冬でなければ (休暇中がやりやすい)	山間の過疎地	過疎地の一村、あるいは一集落に分宿(民家に分宿がいいが、それができなければ公民館、学校、テント等)、昼間は農民とともに農作業、夜はミーティングをし、さまざまな問題について考える。 期間1週間くらいは最低必要、最初の2日間で問題をみつけ、次の3日間で資料を集めたり、思考を深めたりし、最後の1日でまとめる。	≠文化≠あるいは≠文明≠というものを多角的に考えられるのではない。 労働、農業政策、共同体、過疎と過密、医療、教育etc
E	高2 春休み	大和旅行 飛鳥—いかるが— —高野山—吉野	旅行を学習の場とし、教師が生徒の中にはいって指導する。 教科中心の線を優先 名称を研修旅行とする  (修学旅行—観光的イメージ) (研究旅行—やや固すぎる)	
F	または 1学期	山陽、山陰旅行 広島—松江—岡山	指導目標の明確化 1. 古代文化史研修—その時代推移に従う 2. { 現代社会文化—平和都市広島と水島工業地帯 古代文化(出雲)と山陰、山陽の風土の比較 指導体制の確立 1. 生活指導—クラス担任 2. 研修指導—該当教科 ガイドはなるべく避け、現地において研修指導のできる教科の教官を参加させる。	

◎委員会からの中間報告は次のとおり

現在の修学旅行の問題点はどこにあるか

- 歴史的にみて  
行事検討委員会が行事を減らすという方向から高3での修学旅行を高2の大和研究旅行に発展的に吸収した。しかし、そのために研究旅行的性格が次第にボヤけてきた。
- 生徒の方向づけ  
生徒には解放のお遊びムードがあり、楽しければいいという哲学がまん延している。このことは、平常の学校生活にも、また世の中全般の風潮でもある。「修学旅行なんかあほらしくて行かない」という生徒は居らず、みんな喜々として参加している。ムード作りが方向づけができれば、あとはうまくゆくのではない。  
したがって教師の意図と生徒の期待をどうカミ合わすか、カミ合わぬものでは、やる方も大変  
どういう風に生徒にやらせるかが問題であろう

今後の修学旅行をどう考えるか

- アンケート会議での意向投票の結果のうえにたって、しかも廃止、縮小というより新しい方向を見出そうとう考え方で、今後の修学旅行はどうあるべきかを次のようにまとめてみた。
- 要素的な面について

- 研究旅行—A, B, E案……大和旅行本来の形にもどす。
- 研修旅行—C, F案……いわゆる修学旅行を現代的形式に
- 体験旅行—D案……過去にとらわれない新しいイメージで
- 教科との関連について  
あまり偏りすぎると関係教科の負担が大きすぎる。教科に関連した研究はみることだけに集中し、夜の時間が別のものになってしまうおそれがある。教科をこえた何かほしい。
- 方法について  
行程の中に教師と生徒が一緒に話し合えるようなムードと機会が欲しい。現在の大和旅行そのものが悪いのではなくて、やり方を考えるべきだ。寝る時間を決めるから、スリルを求める。話したいものは徹夜でも話し合いをさせたらいい、しかしその内容が問題だ。単なる見学であっても頭で観念的に考えるのと体験とは異なる。全身で考えたり、感じたりできるような問題がほしい。
- 時期、日程について  
高2で3泊4日、2泊では距離的、内容的に制約される。高1で企画するとすれば、高2への引継ぎの問題がある。

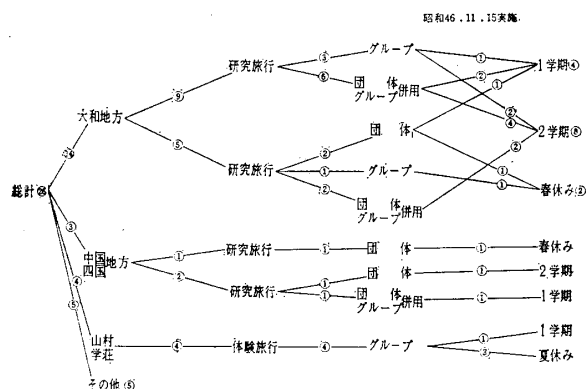
### 来年度の修学旅行をどうするか

去年や今年の反省のうえにたって新しい方向に進みたい、結果的には、過渡期的なものによるか知れないが、11月中に結論をだしたい。

### 3. 教官にアンケートを求める……第2次調査

〈内容〉委員諸案（A～F）に対する意見な中間報告を参考にして、その時期、コース、方法、特徴などについて調査することにした。

その結果は次の通りである。図表中○中の数字はその人数を示す。



### 大和旅行について

- ・問題は時期・場所には無関係で指導上の問題にある。従来のやり方で障害はない。悪いところがあるとすれば、その点を改善すればよい。（同意見3）
- ・どんな計画をたて、指導を加えても、生徒には旅にでるというムードしかない。研究旅行は教官側のひとりよがり。現地へ行けばそれなりのことはあるという程度の大らかな気持で実施すればよいあまり大きな期待をかけすぎないこと。価値がなければ意味がないという意見が多ければ徐々に廃止の方向へもってゆけばよい。（菊里高校の大和旅行も参考にしたら）

### 体験旅行について

- ・生徒部・指導部の年間計画の中に位置づけ、積極的な生活指導の一環として考えていくべきだ。
- ・有意義と思うが実現困難。そこで現在の行事の一部をつかってできる範囲での体験旅行的な試みがやれるならば、実験としておもしろいのではなかろうか。（金大戦とかみ合わせた北陸旅行等）

### その他

- ・なるべく多くの教官を動員し、1グループ10～15名、旅費現行通り、日数1週間以内、行先自由、何かテーマをもたせて春休みに。
- ・単なる手直し程度なら従来のやり方。画期的なものを作るなら全教官の意志を統一して、研究課題にするくらいの意気込みが必要。しかし修学旅行

を何とかしなくてはという切実さは今のところないのではないか。従来のやり方で休暇中に旅行をするのは反対。画期的なもの例としては、グループで時期はバラバラ、日本全土にわたって、テーマはDiscover 公害。

- ・方向はどこでもよい。むしろ形式、方法が生徒との前向き姿勢の中で固まり、それに伴って適地が選定されるべき。
- ・よい教育的効果をあげるためには、健康、安全の上にとって考えなければならない。その点で僻地などの体験旅行には問題がある。時代の流れは、男女間のモラルに相当のちがいがあ。特に旅行後、泣いたり、うわさに悩まされたりして後悔するのは女子に多く、今後考えていかなければならない問題と思う。
- ・時期は高2。方向は泊数をふやさず、大和に限らない。形式は何でもよい。方法は団体がよいが余りこだわらない。

### 4. 委員会最終報告（結論）をまとめる

委員会は教官からの意見（アンケート）に基づき旅行の性格、方向、時期、指導などについて新たに協議し次のようなことを確認した上で結論をまとめることとした。

#### 〈性格〉

所謂修学旅行（観光旅行）なら必要ない修学旅行という呼称から受けるムードがよくない。このため旅行に対するイメージの変換をはかるため呼称をかえる。

体験旅行（D案）については高1の林間学校にその意図を展開するように考えたらよい。

#### 〈方向〉

大和地方を中心とするも大阪・京都くらいまで拡大してもよい。内容に変化をもたせ、指導を徹底し、生徒が積極的に参加するようにする。

#### 〈時期〉

2学期は行事が多く準備が不十分、初夏で日中長く、見学指導も十分できる。新学期の新鮮のうちが効果大を期待できる。

#### 〈指導〉

内容を豊かなものにすると同時に、早期に問題と取組み指導の徹底を図る。また生徒の参加についても十分な指導のもとに研究旅行の意図が積極的に展開できるようにし、生徒に責任意識をもたせるようにする。

#### 〈その他の問題と今後の方向〉

中学修学旅行との関係特に実施期日について、春（5月実施）の遠足との行事関係をどうするか。

旅行者との交渉

生徒旅行委員会の設置と指導

学年保護者会へ説明と理解など

◎結論

1. 性格を研究旅行とする。
2. 方向を大和地方を中心として3泊4日
3. 時期を高2の1学期5月下旬とする。
4. 高2新学期開始と同時に問題と取組ませ指導の徹底を図る。

5. 結論を承認に計画作成指導にはいる

以上の4点を含む結論を多数により承認し、直ちに生徒旅行委員会を設置し、意見をまとめ、企画の段階に年末にはいった。

まとめ

この修学旅行の基本線—結論—については指導の段

階において生徒の理解協力を得るには、やや時間を要すると思われる。それはどんなに練られた「理想案」でも生徒はこれを「おしつけ案」として拒否し、反対する傾向がある。旅行には規則的、習慣的生活から脱出し、精神的解放感を求めようとする一方、未知の世界に対する青年の探険心をゆさぶりつつ、自然の再発見しようとするものである。この解放と発見との感情心理とを理解しながら、生徒の自主性を尊重し、集団行動を体験させるところに旅行の意義があり、教科・教材などと結びつけ、学習指導してゆくところに研究の価値があると思う。

今年は「研究旅行」実施第1年目にはいる。以上の結論がどのように指導へと展開し、実施され、どんな問題点が反省検討されたかについては、第2報告として次年度において期待したい。